

揚陸艇が空を飛び――数条の光線に狙われた。

最初はギリギリで直撃を免れていたが、その内のいくつかが外装を削り、ついには推進力を生んでいたバーニアを直撃。

そうすると、もうダメだ。

バランスを崩した揚陸体は次々に光線の直撃を受けるようになり、ついには墜落するような勢いで地上へと『落ちた』。

剥き出しの岩肌を破壊し、地表を抉り、それでも勢いは弱まらず、数百メートルを移動して――最後に巨大な岩山に正面からぶつかることで、ようやく止まる。

破壊の痕は凄まじく、揚陸体はもう最初の形のほとんどを保てていない。

いたるところから黒煙と漏電が発生し、今にも爆発してしまいそう。

中の乗組員たちは大丈夫だろうか？

……………そんな心配をする余裕など、誰にも無い。

惑星の外に待機している母艦『アルテミス』から発進された揚陸艇の数は三十六。

地表に降りる事が出来たのは、そのうち二十八隻だった。

「出ろ、出ろ、出ろ！ 急げ！！」

最初に降り立った揚陸艇から出てきた体格の良い女が、大仰に手を振りながら急かすように言った。

それに慌てることなく、中から続々と乗員が飛び出してくる。

全員が『女』だ。

それぞれ武装している。

ある者は小型の短銃を、ある者は鋭利なナイフを、ある者は長大な狙撃銃を。

最後の方になると自身を完全に覆う金属製の外骨格、パワードアーマーの装備者まで。

全員が背中に翼のようなバーニアを装備しており、利用することで彼女たちは暗い星空に向かって飛び立つ。

加速、急旋回、飛翔という人間ではありえない機動で空を駆けて行った。

空を飛び回って敵陣をかき乱す。それが彼女たちの役割だ。

そのための存在。そのための命。

――そのために、産まれてきた。

「敵性存在、確認。攻撃を開始の許可を」

一人が呟くように言うと、頭部に装備しているヘッドアーマーを介してその場の全員に情報が共有される。

周囲の地形、敵の存在、その数、味方の分布状況。

そんな彼女の目に映った敵性存在とは、人型をした機械だ。

ヘッドアーマーの鮮明な画像には、人間と同じ二本の腕と脚も持ち、人間と同じように歩行している機械が見えている。

円形の頭部にあるのは紅い単眼で、おそらく惑星の地表に落ちてきた揚陸艇を調査するために向かっているのだろう。

簡易化された人体を想像させる形状は、むしろ、それこそが活動するのに最も効率が良いのかもしれない。

その数は四体。

それぞれ、手には彼女たちが使っているものに似た銃火器が握られている。

彼らは正確にはアンドロイドではなく、人間に似せて作られたロボットの一種であり、創造主である人間の形状や動作を模倣することを目的として産まれた存在。

しかしそれらは長年の情報蓄積を経て、人類を敵と判断した。

※※※※※

……人間が最後の戦争を経て、地球を放棄したのが約四百年前。

宇宙空間での活動は人間にとって過酷極まりなく、その作業を安全に進めるために生み出されたモノ。それがアンドロイド……『マシンロイド』の最初である。

しかしマシンロイドたちは人間が存在する限り戦争は無くならず、その戦果を宇宙に広げると判断——人間と敵対するようになった。

「戦闘を許可します。繰り返す、戦闘を許可します」

重厚なパワードアーマーを纏った指揮官が許可を出すと、同時に引き金が引かれた。

空中で火花が散ったかと思うと、狙撃銃から発射された音速を超える弾丸が無重力空間を切り裂いて飛翔。

銃弾は狙い変わらずマシンロイドの胴体へ直撃し、瞬間、金属製の身体が吹き飛んだ。

いくら宇宙空間での活動を想定した強靱な胴体とはいえ、軍事用の超長距離狙撃ライフルの衝撃には耐えられない。

一発で二体のアンドロイドを貫通した弾丸は、それでも勢いが弱まらずに背後の地面にまで小さな穴を抉ってしまう。

「二体撃破」

『一体撃破』

『一体撃破』

同時にヘッドアーマーから別の声がそれぞれの報告が上がり、彼女の視界の中で残り二体のマシンロイドが一秒の間も置かず頭部を破壊された。

瞬間、バーニアを吹かして加速。

急上昇の直後に先ほどまで彼女が居た空間を灼熱した弾丸が蹂躪した。

二方向からの十字砲火。

直撃すれば強靱なホームクルスの肉体でもミンチになるであろう火力だが、数年前から標準装備となっている翼型のバーニアがあれば空中に逃げられる。

「敵性存在からの攻撃を確認。位置の確認を」

『確認は完了している。後続の揚陸艇で来た突入部隊が殲滅に向かう』

その会話はどこまでも事務的で、むしろ機械的にも思えるほど。

これではどちらが『マシン』なのか分からない——と女はため息を吐いた。

(ですが、ここは戦場です。考えている余裕は……ない)

生き残るため。帰るため。たとえ機械になってでも戦い抜かなければならない。

そう考え直すと、女はバーニアを吹かしてさらに敵陣の奥へと飛び込んでいった。

※※※※※

暗い空。岩が剥き出しになった大地。周囲には破壊された大地の残骸が浮かび、暗い空の向こうでは紅い爆炎が絶え間なく上がり続けている。

戦場。

宇宙空間での戦闘だ。

大地の果てにある機械造りの要塞に向けて数千人の兵士たちが飛び出し、しかし、いたる所に設置された迎撃兵器とそれを上回る数万にも及ぶ人型兵器たちが彼女たちを撃ち落としていく。

そんな惨劇を前にしても、誰一人として臆する事はない。

——何故なら、そのためだけに彼女たちは生まれたのだ。

機械を壊す兵器。死への恐怖を持たないよう教育された、生きた兵器。

けれど人としての心を持っている——機械ではない、人造生命体の兵士たち。

それが……飼育機と培養液の中で育てられたホームクルスだ。

「援護射撃を開始します、セブンスの皆さんは白兵戦の準備を」

空中戦闘用の翼型バーニアから灼熱色の推進剤を迸らせながら宙を駆けるのは、まるで流星のように煌めく銀髪が印象的な美少女ホームクルス、メディシアだ。

白いレオタード上に黒インナー型の戦闘服をぴったりと張り付けた肢体は肉付きに乏しく、けれどしなやか。

まるでアスリートのように引き締まっており、むっちりとした肉付いた下半身をメタリックな輝きがあるニーソックスで飾っている。

インナーの上から腹部や関節を守る装甲を纏っているが、守備力は明らかに少ない。

それは彼女が接近戦を得意としていない、後方支援が主任務だからだろう。

胸は小振りです、数値にするなら71センチのBカップ。

どれだけ激しく動いてもほとんど揺れることはない。大きな胸なんて、それこそ戦いの邪魔になるだけだ。

まだ若く、幼さが残る容姿——良く言えば機動性を重視したスレンダーな肢体。ではあるが、この戦場では一番の年長者である美少女は視線を鋭くしながら戦況を見渡している。

どれだけ幼く見えても、彼女は第四世代『フォース』のホームクルス。

この戦場では誰よりも年長で、しかしそれは型遅れということでもある。

最新型の第七世代『セブンス』より三代も型落ちしていると考えるべきか、それだけの戦闘経験を積んだ熟練の兵士と受け取るべきか。

「いきます」

第四世代のホームクルス、メディシア・フォースは地上から狙ってくる迎撃兵器の銃撃を最小限の動きで避けながら、持っている長大な砲身を地表に向け――撃った。

撃ち出されるのは実体弾ではなく、彼女の背にあるバックバックから経由したエネルギー。光線だ。

撃ち出されたエネルギーは宇宙空間で減衰することなく伸び、数百メートルも先にある目標に命中。

熱線が兵器の装甲を焼き、溶解させ、内部のエネルギータンクにまで到達すれば巻き込んで暴発する。

それが、二回。

地上からマシンロイドの開発工場へ向かう陸上部隊を狙っていた兵器が沈黙すると、ワードアーマーを纏った指揮官世代、第六世代『シックス』の指揮の下、最新世代、第七世代『セブンス』の面々が前進を再開していくのが見えた。

「次は……」

メディシアは目標の沈黙と味方部隊の再前進を確認すると、ブースターを操作して戦場を移動していく。

第四世代の彼女は遠距離攻撃に特化した性能となっており、近接戦闘や施設への侵入に適していない。

エネルギー効率もそれほど優れておらず、人間に例えるなら運動が苦手で体力も低いようなものなのだ。

その点、集中力という一点は最新の第七世代までの中で一番優れている。

故の狙撃。遠距離からの支援。

揚陸艇から無事に戦場へ辿り着いた、メディシアをはじめとした数百人の第四世代『フォース』の部隊は戦場を空から支配するのだ。

（マシンロイドたちの数が多すぎる――これなら、工場の中はがら空きなのかもしれませんね）

マシンロイドの開発施設は事前の調査通り、この惑星上に一つだけだった。

本来なら惑星全体に効率よく向上を配置し、最大限の効率で仲間を増やしていくのが常識だが――。

（まだ、この惑星に辿り着いて時間が経っていないのかも）

人類が生存できない無酸素の宇宙空間でも活動できる彼らは、辺境の、人が住めない星を改造して開発施設にしてしまうのだ。

今回はその一つを発見し、ホムンクルス部隊に破壊命令が出ていた。

しかも運良く、開発が進む前にだ。

（この広い宇宙の中にどれだけの工場があるか分からないけれど、一つ一つを潰していかなければ数の差が埋められないですもんね）

人類将校からの命令を反芻しながら、メディシアは任務を忠実にこなしていく。

岩だらけの地表を飛び回り、白兵戦部隊を支援するのだ。

「援護射撃が可能です、B-27 地区の歩兵要員は必要なら連絡を」

メディシアはイヤークフ越しに周囲へ伝え、地上に向けてエネルギー砲を放った。

その射線上にはマシンロイドたちが開発した支援ドローンと、更にその先には人型の機械が数十体。

エネルギーの奔流はそれらを焼き払っても勢いが衰えず、そのまま一気に半壊させる。

残った程度の戦力なら、地上部隊だけでも対応が可能だ。――手が空くと他地区への支援に回り、どんどん仲間たちの活動範囲を広げていく。

メディシアはその結果を見て、一瞬、動きが止まった。

混戦状態では、たとえ自分がどれだけ奮戦したとしても戦況がいきなり好転するような事は無いだろう。

工場へ辿り着くためには、何かしら特別な方法が必要になるのではないかと考えた。

「あ」

その時だ。

メディシアの視界に、道が開けた。

まだはるか先ではあるが、マシンロイドの生産工場までドローンも、マシンロイドも、そして迎撃兵器も。一つも存在していないのだ。

偶然だ。

左右の戦場が激戦となり、ちょうど、メディシアの直線状に居た戦力たちが左右に別れたのである。

「道が拓けました。私が先行します」

メディシアは合図の代わりに虚空に向かってエネルギー弾を二発撃つと、迎撃兵器の有無を正確に確認。

やはり敵戦力は存在しておらず、意を決してその『道』を進んだ。

「偶然でしょうが、左右の戦場へ戦力が分散したことで一時的に道が出来ているようです」

本来なら命令されたことに逆らわず、第四世代はそのまま戦場の支援を続けるべきだろう。

しかし機械とは異なる生体思考装置、脳が独自の判断で優先順位を変える。

この戦場をより有利に進めるために――それこそがマシンロイドには無く、ホムンクルスだからこそ可能な『柔軟な判断』。

「このまま進みます」

それは、惑星全体を戦場としている規模の戦闘では奇跡に等しい偶然なのかもしれない。メディシアはそう思いながらバックパックのカートリッジを取り替え、スピードを上げる。

後ろからは同じくフォースの面々が可能な限り追従して来ており、地上でも少し遅れてセブンスたちが工場までの距離を今のうちに詰めてきていた。

「一気に工場に向かいます」

本来は上位世代の援護が主な任務となるが、今この時は、機動力があるフォースの方が前へ進める。

メディシアの全身が加速による熱に包まれ、彼女は光の矢となって突き進んだ。

しばらくすると工場周辺を守っていた最後の迎撃兵器が起動し、戦闘を飛ぶメディシアを狙った。

だが、ここまで加速していれば狙撃も当たらず、機銃の弾は周囲を囲む熱波によって防がれる。

メディシアが包囲を突破するのに数分もかからず、一度包囲を突破すればすぐに次の迎撃の準備は整わない。

「今のうちに」

工場内へ突入すると、メディシアは後続を待たずに奥へと進む。

工場内のマップは誰も持っていない――少しでも後続の安全を確保するために、先行するのだ。

「メディシア・フォース。先行を開始します。マップの取得を優先してください」

イヤークフへそう伝え、バックパックから狙撃銃を外し、視界を狭めるヘッドアーマーを外すと通信とバイタルチェック機能が内蔵されたイヤークフを装着。

――白兵戦用の武器に持ち替えて、メディシアは正面の道を進むことにした。

※※※※※

「はあっ！！」

人が住めない辺境にある惑星――そこにある一つの兵器開発の工場。

侵入者対策の大量兵器や、用途不明の機器が並ぶ廊下を進んでいると、当然、工場への侵入者を迎撃するためにマシンロイドたちが展開してきた。

第四世代は接近戦を不得意とするが、しかし、後継世代に劣るというだけで少数が相手なら基本スペックはマシンロイドを軽く凌駕する。

手にしたビームソードを振る動きは熟練の剣士を想像させ、狭い通路でその細身の身体を的確に使い、床だけでなく壁や天井すら足場にしながらあっという間に四体にマシンロイドを切断した。

「抵抗はそれほど激しくない――こちらの通路は外れの可能性があります」

メディシアが装着しているイヤークフからの情報を元にマップを生成しているであろう、友軍に説明しながらメディシアは奥へと進んでいく。

ここはマシンロイドの開発施設。ならばその戦力は無尽蔵に近いはずなのだ。

しかし迎撃に来るのは一回で数体程度。

工場の外に予想以上の戦力が展開しているとはいえ、迎撃戦力が明らかに少ない数なのは、工場中心部に向かうのとは外れの道を進んでいるからかもしれない。

この時にはもう後続のフォースが工場に到着し、メディシアと同じように先行して探索を開始していた。

陸戦のフィフス、セブンスの部隊も工場に迫ってきており、メディシアが間違いの道を進んだということは『正解への選択肢が一つ減った』ということでもある。

悲観することなく、メディシアは更にその通路を奥へと進んでいく。

そのまま進むと、開けた場所に出た。

遠くで機械が稼働している音が響いている。時折足元が揺れるほどの振動だ。

「ここがマシンロイドの開発施設……」

正確にはその一部だろう。

施設の奥から機械のアームによって部品が運ばれてきて、メディシアの目の前で胴体部分が組み上げられていく。

製造ラインが複数あり、目測ではあるが一秒に十体ほどが組み上げられていた。

かなりの速さだ。

ホームクルスは一体を製造するのに約4か月が必要となる。

これは反乱の危険性が高い機械に頼らない『脳』を生成するのに必要な時間であり、戦場へ出るにはそこから更に二か月、肉体訓練と戦闘経験を積む必要がある。

それを必要としない『速さ』こそがマシンロイド最悪の脅威だ。

一つの施設があるだけで毎日数千体、もしくはそれ以上の戦力が作られて宇宙へ広がっていくのだから。

固体の戦力ならホームクルスが圧倒しているが、数の面ではおそらく一生追い付けないであろう差があるのだ。

「胴体を生成する施設を発見しました。――これより、破壊準備に取り掛かります」

そんな施設を見逃す必要はない。

メディシアはイヤークフ越しにそう伝え、バックバックを下ろした。

特定の動作を行うことで、この機動支援装置は高威力の爆弾へと変わるのである。

しかしその威力は工場全体を爆破するには足りない。他部隊が腕部、脚部、頭部、そして工場の中心部を見付けるまで待つ必要があるだろう。

(ここだけを爆破して工場全体が警戒したら、他部隊の任務に支障が出てしまいますね)

メディシアは爆弾を手動に切り替え、監視カメラなどの映像装置の死角を意識しながらバックバックを物陰に隠した。

その上から機械の探索にも見つからないよう電磁式の迷彩装置を使って、バックパック爆弾自体が見えないようにしてしまう。

「あとは、他部隊が各施設を見付けたタイミングで爆破すればいいですね」

起爆装置は彼女が身に着けているイヤークフだ。

これさえ無事なら、電波が届く限り爆破が可能である。

(後は他部隊が工場の調査を行ってくれば……)

しかしそう考えたのも束の間。

荒々しい足音と共に、数十体のマシンロイドたちが向かってくる音を、メディシアの耳が拾った。

急いで爆弾を隠した場所から離れる。

(この位置なら、戦闘が激しくなっても爆弾に誤射する危険性は低いはず)

メディシアが持つ起爆スイッチなら工場の外へ出ても起動可能な範囲だが、しかしこの場を離れてもし爆弾を発見されてしまったらまたここまで戻ってこなければならなくなる。

ならば、この場に留まって起爆のタイミングまで爆弾を守り続けた方が安心だ。

「来なさい。貴方たちを破壊します」

メディシアは数十体ものマシンロイドに囲まれながら、しかし臆することなくそう言い放った。

そもそも、そういう感情を持ち合わせていないのだが。

まるで少女のように小柄なメディシアが、筋骨隆々な男たちに囲まれているような構図だ。

実際にはその身体が鍛えた人間を模しているだけで、機械の身体の表面を覆っているのは人工筋肉。骨格は金属で形成されている。

瞬間的な出力は人間を遥かに凌駕し、その腕力は抱きしめるだけで大の大人を真っ二つにサバ折りにしまえるほど。

機械に表情は不要だからか頭部は一律で同じ仮面をかぶっており、瞳は赤の単眼。

――その内側に、蠢く人工筋肉の触手が見える。

人の調整から外れ、自己進化を経たからか。

マシンロイドたちの一部は生物化してしまっており、彼らはより『生き物』に近付いていた。

おそらく、機械による自己進化の弊害だろうと人類の科学者は分析している。

機械がひたすらに増殖を繰り返し、そして、人間ととってかわる、もしくは人間を支配する『生物』へ近付こうとしているのだ。

「はあっ！」

そのおぞましい姿を見てもメディシアは表情を少しも変えず、手にしたレーザーブレードで斬りつける。

マシンロイドたちの動きは確かに人間を凌駕しているが、ホムンクルスはそれ以上だ。

しかもメディシアは接近戦を得意としない、遠距離支援型。

それでもマシンロイド数十体では相手にならず、どんどん斬り伏せられていく。



「ふう」

それらを全滅させるまで十分ほど。

周囲にはマシンロイドの残骸が転がり、斬り裂かれた生体部品の一部がまるでタコのように床をのたうち回っている。

息一つ乱すことなく、メディシアはこの場の確保に成功した……ように見えた。

「メディシア、この場に留まります。可能であれば援軍を。他施設の確認が済んだ段階で、この場を爆破する準備は整って……」

イヤークフ越しに状況を説明し、指示を待つ。

その僅かな時間——メディシアの意識が周囲に散らばるマシンロイドたちの残骸から離れた。

当然だ。

それらは残骸。もう生きていないのだ……そう思っていた。

「他部隊の状況……っ、しまった……！」

メディシアが報告していると、足に僅かな痛みを感じた。

ホームクルスは戦闘を優先するために、戦闘時は五感が鈍っている。痛みのような感覚で動きを邪魔しないためだ。

そのホームクルスが『痛み』を感じるほどだ。それは普通の人間ならかなりの激痛であり、戦闘用に調整されているとはいえ生身に近い肉体にはかなりの負担となる。

メディシアはすぐにその場を離れた。

飛び退いたと言ってもいい。

その視線の先には床を這う一本の生態ユニット——タコ足の先端のように尖った触手が蠢いている事に気づき、その端正な美貌を嫌悪に歪める。

「く……この程度の事に気付けないなんて……」

次に、痛みを感じた右足から力が抜けた。

マシンロイドたちはこれまでのホームクルスとの戦闘において、彼女たちに高い対毒性があることを理解している。

しかし、その対毒性でも防げないものがある。

神経系の毒だ。

四肢を動かすために必要な器官。神経。それだけはホームクルスでも『無くす』事はできない。

通常の毒程度なら耐えられるが、これまでの戦闘経験からホームクルスにも通用する……普通の人間なら激痛でショック死するような神経毒を体内で生成できるよう、自分たちを強化していた。

「身体が、動かない……」

神経毒はすぐに全身へ回り、メディシアは動けなくなった。

しかし相手は触手一本。しかも切り裂かれて死にかけだ——。

「この程度で動けなくなるわけには」

そう呟くメディシアの背後に、新手のマシンロイドたちが数体、立った。

ここは彼らの生産施設。戦力はどこにでもいる。

——正常な状態であれば素手でも倒せる相手だが、神経毒を受けた今のメディシアはなす術も無く抱え上げられると、施設の奥へと運ばれていくのだった。

(く、不覚……ですが、爆弾の位置は気付かれなかったようですね)

ただそれだけは救いと言えるのかもしれない。

メディシアはもう首を上げる事すら億劫に感じながら、無防備に、運ばれるしかなかった。